

# 支援的ユーモア志向がシャーデンフロイデに及ぼす影響

— 妬みおよび不公正な現状の認識との関連も踏まえて —

菊池里奈 関西大学大学院心理学研究科  
阿部晋吾 関西大学社会学部  
福井 齊 梅花女子大学心理こども学部

The effect of supportive humor, envy,  
and recognition of unjust status quo on Schadenfreude

Rina KIKUCHI (Graduate School of Psychology, Kansai University)

Shingo ABE (Faculty of Sociology, Kansai University)

Hitoshi FUKUI (Faculty of Psychology and Children's Studies, Baika Women's University)

In this study, we examined envy, recognition of unjust status quo, and supportive humor as factors that suppresses Schadenfreude. We collected data from 158 female university students (mean age: 19.36 years, standard deviation: 1.15 years) by using a paper questionnaire and web-based questionnaire. The multiple regression analysis showed that envy and recognition of unjust status quo had there was a significant positive association with Schadenfreude. In addition, supportive humor was significantly negatively associated with Schadenfreude, suggesting that supportive humor orientation may be effective in suppressing Schadenfreude.

**Keywords:** Schadenfreude, supportive humor, recognition of unjust status quo, envy.

## シャーデンフロイデ

他者の不幸を見て喜ぶことは、決して特異な感情ではない。たとえば、ドラマや小説などで登場人物が他のキャラクターから意地悪をされていたとして、後にその人物が何かしらの罰や報復を受けているのを見たとき、私たちは喜ばしい気持ちや面白いという感想を抱くことがある。これも他者の不幸への快感の一つにあたる。こういった「ざまあみろ」、「いい気味だ」という感情は、ドイツ語でシャーデンフロイデ (Schadenfreude) と呼ばれている (澤田, 2008)。日本語にはシャーデンフロイデを指す単語自体はないが、「他人の不幸は蜜の味」ということわざ

や、近年では「メシウマ (他人の不幸で飯がうまい)」という単語が生まれるなど、他者の不幸を喜ぶ感情自体はさまざまな様式で表現されてきた。

近年、シャーデンフロイデのメカニズムを理解するため、喚起する過程や状況、特性などの研究が行われている。Ben-Ze'ev (1992) は、シャーデンフロイデの喚起には、ターゲット人物が主観者よりも優位な立場にある人物であることや、ターゲット人物が不幸に苦しむに足る人物であることであることなどが要因になっていると述べた。これはつまり、ターゲット人物への妬みや、ターゲット人物に降りかかった不幸の相応性がシャーデンフロイデを喚起さ

せているとも考えられる。Feather (1989) は、平均的な成績の学生よりも成績の良い学生が、大きな試験で不正行為を発見されペナルティを課されたとき、参加者はより喜びを感じたという結果を示した。また、成績優秀者はよりペナルティを受けるに値すると判断されたとも報告している。これは同様の罪であっても、妬ましいと感じさせるターゲット人物の方がシャーデンフロイデを喚起させたことになる。また、Feather (2008) は参加者の成績が低いほど、より高い成績を収めた者の成功に対してシャーデンフロイデを喚起させることを示した。

## 妬み

近年の研究の中で、シャーデンフロイデの喚起には妬みという感情が一つの要因として関わっているのではないかと議論されている(澤田, 2008; 森尻・伊藤・上淵, 2014)。妬み (envy) とは、自分が望んでも手に入れられないものを享受している他者を知って生じる痛ましい不満、悪意、そして恨みのことである (Smith, 2013 澤田訳 2018)。澤田 (2008) は質問紙実験の中で、自己と同等の立場であるよりもターゲット人物が自己より優位な立場にある場合のほうがシャーデンフロイデを喚起させやすいことを示した。これは Ben-Ze'ev (1992) が指摘する、競争あるいは比較が可能な立場にある他者への妬み感情を起因としてシャーデンフロイデが成立しているケースといえる。また、森尻他 (2014) でも妬み感情が妬み行動を介し、シャーデンフロイデに影響を及ぼすことが明らかになっている。さらに、妬みには、良性 (benign) と悪性 (malicious) があることが示唆されている。良性の妬みは、妬みが生じた際に自らの能力や行動を省み改善させることで向上心に帰属させるものであり、悪性の妬みは妬みが生じた際に相手を引きずり落そうとする悪意を持ったものである (Van de Ven et al., 2015)。また Van de Ven et al. (2015) は、良性の妬みではなく、悪性の妬みがシャーデンフロイデとより強く関わっていることを示した。

## 不公正な現状の認識

シャーデンフロイデの一般的な特徴として「ターゲット人物の不幸が相応なものであるときに喜ぶ」というものがある (Ben-Ze'ev, 1992)。つまりシャーデンフロイデというのは、少なからずターゲット人

物に不幸になる原因・理由が存在すると考えられたときに喚起されるものであるといえるだろう。不幸になる原因や理由というのは、ターゲット人物が不幸に遭うに足る行いをしているということである。たとえば、浮気や不倫、賄賂や横領など、道徳的あるいは規則的な違反を犯し、不公正な手段で金銭や社会的地位、自由など何らかの利益を得ることなどが該当するだろう。

社会や日常の中で起こっている因果を見聞きし、それらに正しい報いがあることを望んでいる観念のことを、正当世界観、正当世界信念、また正世界仮説などと呼ぶ (e.g., Lerner & Simmons, 1966; Lerner & Miller, 1978; Rubbin & Peplau, 1975; 今野・堀, 1998; 白井, 2012)。この観念は、不正を行う人物にはしかるべき罰が与えられ、公正を尽くして行動するものには十分な報酬が与えられるべきだという考えから成り立っているものである。

しかし、社会における貧困の犠牲者や社会的弱者の存在によって正当世界観が脅威にさらされることがある (Rubbin & Peplau, 1975)。Lerner & Simmons (1966) は、被害者が苦しんでいる姿に直面し、またその苦しみが何らかの手段で緩和できないと考えたとき、つまり、自らの持つ正当世界観への脅威を感じたとき、観察者はしばしば被害者の苦しみを被害者自身に帰属させ、正当世界観の維持・回復を行うことを示している。

シャーデンフロイデがその心理的合理化の一つであることを示唆する例として、Pietraszkiewicz (2013) は正当世界観への脅威がシャーデンフロイデを強める可能性を示している。すなわち、正当世界観への脅威にさらされるような記事を読んだ条件のグループはそうでないグループに比べてシャーデンフロイデのシナリオを他者に対してより推奨することが明らかになった。また、石井・澤田 (2015) は不正者に対する不幸の喜びについて、澤田 (2008) のシナリオに準じた、ターゲット人物が規範を守り公正な対応をする「公正」、規範を守らず、不公正な対応をする「不公正」の二つの条件のシナリオを作成し、シャーデンフロイデの測定を行った。その結果、公正条件よりも不公正条件のターゲット人物に対するシャーデンフロイデが強くなることが明らかとなった。不幸の相応性がシャーデンフロイデを喚起しやすいことから、不公正な現状を認識する、あるいは公正ではないかもしれないという疑念を抱くこと

で、シャーデンフロイデが喚起される可能性が高い。

### 支援的ユーモア志向

前述のような妬みの生起、不公正な現状の認識といった状況は、自らの能力や現状への不満を喚起させるようなストレス事態として捉えることができる。シャーデンフロイデもそういったストレス事態を対処するための社会的機能として考えられているが (Lange & Boecker, 2019)、ストレス事態を緩和し、精神的健康に好影響を及ぼす対処として、ユーモアが挙げられる (Lefcourt, Davidson, Prkachin & Mills, 1997)。上野 (1992) はユーモアを「おかしさ」、「おもしろさ」という心的現象を示すものであると定義している。また、Martin (2007 野村・雨宮・丸野訳 2011) はユーモアの形態を、人を楽しませ関係を深めたり、人間関係の緊張を軽くするためにユーモアを用いる「親和的ユーモア」、人生の不調和をおもしろいと判断したりストレスや災難にあってもユーモラスな展望を維持する「自己高揚的ユーモア」、他者への攻撃や非難、支配を動機としてユーモアを用いる「攻撃的ユーモア」、自身を犠牲にしておかしな言動をすることで人を笑わせるなどの特徴を持つ「自嘲的ユーモア」の4つに分類した。シャーデンフロイデは攻撃的なユーモアの形態の一つとして挙げられている。また Martin (2007 野村他訳, 2011) は同時に、攻撃的ユーモアは短期的には個人の幸福を増幅させる手段となるものの、長期的には他者との間で不和の原因となる可能性と、攻撃的ユーモアというスタイルそのものが基本的に精神的健康に有害なものでありうることを示唆した。日本人を対象としてユーモアコーピング尺度の作成を行った本郷 (2019) は、攻撃的ユーモアコーピングと抑うつの中に弱い正の関連があったことを報告している。ユーモアコーピングとは、ストレスのかかる生活経験にユーモアを用い対処すること (Martin, 2007 野村・雨宮・丸野訳 2011) である。シャーデンフロイデは性質上、妬みや正当世界観への脅威といったストレス事態を対処するために喚起された攻撃的ユーモアコーピングともいえる。

攻撃的ユーモアが精神的健康に負の影響を示す一方で、自己高揚的ユーモアや、親和的ユーモアは精神的健康や幸福に対して正の相関を示したことが報告されている。(Martin, Puhlik-Doris, Larsen, Gray, & Weir, 2003)。この自己高揚的ユーモアと親和的の

ユーモアの2つの側面を合わせ持つユーモアとして、宮戸・上野 (1996) の提唱した支援的ユーモアが挙げられる。支援的ユーモアとは、自己や他者を励まし、勇気づけ、援助することを目的として表出されるユーモアである。上野 (1992) は自己の問題を客観視し余裕を与えることのできる支援的ユーモアがストレス緩和に最も効果的なユーモアであると述べている。実際に支援的ユーモアと情緒との関連を検討した研究として、谷・大坊 (2008) は支援的ユーモア感知行動 (ユーモア刺激を感知すること) を多くとる人はそうでない人に比べ情緒が安定しているという結果を示した。さらに宮戸・上野 (1996) は支援的ユーモアを志向し表出することが困難や逆境などのネガティブ事象に対する耐性を強め、結果として抑うつ状態に陥ることを防ぐという結果を示した。

なお、ユーモアとシャーデンフロイデの関連について、Lee (2019) は中程度の正の相関 ( $r = .51$ ) を示している。しかし、質問で用いられたユーモアは1項目のみであり、用いられたユーモアが何を指しているかはいまいかつユーモアの調整効果を検討しているわけではなかった。

### 本研究の目的

妬みを生起する、不公正な現状を認識するといったように、シャーデンフロイデの喚起を促進する要因はこれまでも明らかとなっているが、それを抑制する要因については十分に検討されていない。本研究では、妬みや不公正な現状の認識といった互いに独立した異なるストレス事態へのコーピングとしての支援的ユーモア志向の検討、ならびに支援的ユーモア志向がシャーデンフロイデの喚起にどのような影響を与えるか検討するものである。検討するにあたって、以下のような仮説を設けた。

仮説1：妬みと不公正な現状の認識がシャーデンフロイデの喚起を促進するだろう。仮説2：支援的ユーモア志向が妬み・不公正な現状の認識から喚起されるシャーデンフロイデを抑制するだろう。これらの仮説を検証することを本研究の目的とする。

## 方法

### 調査対象者と方法

調査対象者は関西圏の女子大学の学生 159 名であり、その内の有効回答者数は質問に半分以上未回答

だった1名を除く158名(平均年齢19.36歳, 標準偏差1.15歳)であった。調査の承諾を得た講義で受講生に対して調査の協力を依頼した。回答は無記名でプライバシーが保護されていること, 協力は任意であること, 協力の拒否によって不利益が生じないことを口頭及び文書で伝えた上で, 調査協力に関する設問の回答をもって同意とみなした。また, 調査の実施に関して, 新型コロナウイルス感染予防対策の影響から実地調査が困難になり, 14名の調査協力者に対してはグーグルフォームを用いて作成されたウェブ上の質問紙調査に協力を依頼した。実施時期は2020年2月上旬であり, 実施時間は5~15分程度であった。

### 質問項目

**フェイス項目** 調査への協力確認, 年齢の回答を求めた。

**仮想シナリオ** 澤田(2008)において使用された複数のシナリオのうち, シャーデンフロイデが喚起されやすいと確認されたシナリオを用いた。具体的なシナリオの内容については以下に示す。

**妬み** シナリオに登場する架空のターゲット人物“T.F.さん”の状況・特徴(有名私立大学に通う4年生であり, 裕福な家庭で育ったため入学から市内の高級マンションで一人暮らしをしている・スポーツがとても得意・成績が非常に優秀・希望していた一流企業から内定をもらう, など)と, それを読んで, 調査協力者がどう感じたかを回答してもらった。項目は澤田(2008)と同様の妬みに関する5項目(e.g., 「T.F.さんに対して嫉妬を感じる」, 「T.F.さんに対して劣等感を感じる」)を用いた。また, 妬みはネガティブな感情であり, 回答時の防衛的な反応(i.e., 社会的な望ましさを考慮し, すべての妬み項目で得点が低くなるよう回答してしまう)が懸念された。そのため, 澤田(2008)と同様に, 6項目からなるフィルター項目(e.g., 「私はT.F.さんをとてもよくできた人だと思う」, 「T.F.さんと知り合いになれば, すぐにT.F.さんを好きになると思う」)を加えた。すべての項目は6件法(「1. まったくそう思わない」から「6. 非常にそう思う」)で評定された。

**シャーデンフロイデ** 澤田(2008)と同様に, ターゲット人物の後日談として, 飲酒運転を行い警察に検挙され, それが原因となり内定を取り消され恋人に振られてしまうという仮想場面が提示された。

その後このシナリオに対して, どう感じたかを回答してもらった。質問項目は澤田(2008)と同様に, シャーデンフロイデ因子と同情因子からなる13項目(e.g., 「おもしろい」, 「楽しい」, 「いい気味だ」, 「気の毒だ」, 「残念だ」, 「つらい」)を用い, 6件法(「1. まったくそう思わない」から「6. 非常にそう思う」)で評定された。なお, 今回は研究の目的上, 同情はフィルター項目として扱った。

**不公正な現状の認識** 今野・堀(1998)の正当世界尺度を用いた。正当世界尺度は, 因果応報(「この世の中では, 努力はいつか報われるようになっていく」, 「この世の中では, 悪いことをした者は必ずその報いをうける」)と不公正な現状(「この世の中では, 努力や実力が報われない人が数多くいる」, 「この世の中では, 悪いことや間違ったことをしても見逃される人が数多くいる」)を記述する4項目からなり, 個人の持つ正当世界観を測定するものである。すべての項目は5件法(「1. そう思わない」から「5. そう思う」)で評定された。

また, 因果応報の項目は「この世の中では, 努力はいつか報われるようになっていく」, 「この世の中では, 悪いことをした者は必ずその報いを受ける」から構成されており, 不公正な現状の項目は「この世の中では, 努力や実力が報われない人が数多くいる」, 「この世の中では, 悪いことや間違ったことをしても見逃される人が数多くいる」から構成されている。そのため, 以降の分析では不公正な現状を本研究における「不公正な現状の認識」として扱い, 使用した。

**支援的ユーモア志向** 宮戸・上野(1996)の支援的ユーモア志向尺度を用いた。支援的ユーモア志向尺度は, 支援的ユーモアを感知し理解して好む志向の程度を測る側面と自己や他者に対して支援的ユーモアを表出する行動の程度を測る側面から構成される尺度であり, 8項目(e.g., 「ちょっと寂しそうな人がいると, 冗談などと言って笑わせたい」, 「人を救うようなユーモアが好きだ」)からなる。すべての項目は5件法(「1. あてはまらない」から「5. あてはまる」)で評定された。

分析にはHAD16\_302を使用した。

## 結果

### 妬みとシャーデンフロイデの信頼性

澤田(2008)に従い, 妬みおよびシャーデンフロ

イデの $\alpha$ 係数を算出した。妬みの $\alpha$ 係数は.75, シャーデンフロイデの $\alpha$ 係数は.81であり, 十分な内的整合性が確認された。

### 不公正な現状と支援的ユーモア志向の構造と信頼性

各特性要因の構造と信頼性を確認するため, 正当世界尺度の4項目について確認的因子分析を行ったところ, 先行研究(今野・堀, 1998)と同様の2因子構造が確認された。 $\chi^2(1)=1.992(p=.16)$ , GFI=.994, CFI=.988, RMSEA=.079であり, 十分な適合度であると判断した。不公正な現状の $\alpha$ 係数は.61, 因果応報の $\alpha$ 係数は.60と, 十分な内的整合性は確認されなかったが, 各因子2項目という項目数の少なさを考えると許容範囲と判断した。

次に, 支援的ユーモア志向尺度の8項目に対して確認的因子分析を行ったところ, 同様の因子構造が確認された。適合度は $\chi^2(20)=80.474(p<.001)$ , GFI=.879, CFI=.852, RMSEA=.138, AIC=.112.474であった。なお, 確認的因子分析にあたり, 因子負荷量の低い質問項目(q3\_5「いやなことがあっても笑いとばせる」)を除くと $\chi^2(14)=28.036(p=.01)$ , GFI=.950, CFI=.960, RMSEA=.079, AIC=56.036となり, 適合度が十分な値になるが, 後の分析の結果に影響はないことが確認されたため, 原著に従い8項目すべてを残したままその後の分析を行った。支

援的ユーモア志向の $\alpha$ 係数は.82であり, 十分な内的整合性が確認された。

### 相関分析

シャーデンフロイデ, 妬み, 不公正な現状, 支援的ユーモア志向の関連性を検討するために相関分析を実施した。その結果, シャーデンフロイデと妬み( $r=.35, p<.001$ ), シャーデンフロイデと不公正な現状( $r=.33, p<.001$ )にいずれも有意な正の相関が認められた。また, シャーデンフロイデと支援的ユーモア志向( $r=-.23, p=.003$ )は有意な負の相関が認められた。

### 重回帰分析

シャーデンフロイデとの関連を検討するために, シャーデンフロイデの尺度得点を目的変数, 妬み尺度得点, 支援的ユーモア志向尺度得点, 不公正な現状尺度得点を説明変数とした重回帰分析を行った。加えて, 「支援的ユーモア志向」と「妬み」, 「不公正な現状」の交互作用がシャーデンフロイデに関連を及ぼしているかについても同時に検討した。まず, 重回帰分析を行うにあたり, 多重共線性の問題が生じていないことを確認した。分析に伴い, すべての説明変数を標準化し, 上記の交互作用項を投入した(Table 2)。

Table 1. 相関分析の結果

	1	2	3	4
1. シャーデンフロイデ	—			
2. 妬み	.35**	—		
3. 不公正な現状	.33**	.06	—	
4. 支援的ユーモア志向	-.23**	.09	-.13	—
平均値	1.96	3.06	3.97	3.28
標準偏差	0.96	1.12	0.74	0.73

\*\* $p<.01$

Table 2. 重回帰分析の結果

変数名	シャーデンフロイデ	95%下限	95%上限	VIF
妬み	.37**	.23	.50	1.03
不公正な現状	.28**	.15	.42	1.04
支援的ユーモア志向	-.21**	-.36	-.06	1.20
支援的ユーモア志向*妬み	-.02	-.16	.12	1.10
支援的ユーモア志向*不公正な現状	-.10	-.25	.04	1.10
$R^2$	.28**			

\*\* $p<.01$

その結果、妬み ( $\beta = .36, p < .001$ ) と不公正な現状 ( $\beta = .27, p < .001$ ) がシャーデンフロイデに対し有意な正の関連を及ぼしていた。一方で、支援的ユーモア志向 ( $\beta = -.21, p = .008$ ) はシャーデンフロイデに対し有意な負の関連を及ぼしていた。また、交互作用はいずれも有意ではなかった。

### 考察

本研究ではシャーデンフロイデと妬み、不公正な現状の認識、支援的ユーモアの関連性を明らかにすることを目的とした。それぞれの仮説について考察する。

「仮説1：妬みと不公正な現状の認識がシャーデンフロイデの喚起を促進するだろう」は支持された。重回帰分析を行った結果、妬みと不公正な現状がシャーデンフロイデに対し正の関連を及ぼしていた。これは、先行研究の結果とも一致するものである。

「仮説2：支援的ユーモア志向が妬み・不公正な現状の認識から喚起されるシャーデンフロイデを抑制するだろう」は支持されなかった。重回帰分析の結果、支援的ユーモア志向と妬み、支援的ユーモアと不公正な現状の交互作用とシャーデンフロイデはいずれも関連がみられなかった。一方で、支援的ユーモア志向とシャーデンフロイデに直接的な負の関連がみられた。同じユーモアという分類でありながら、攻撃的ユーモアコーピングであるシャーデンフロイデと支援的ユーモア志向というユーモアコーピングが負の関連を示したことは興味深い結果である。また、支援的ユーモア志向は、妬みや不公正な現状の認識とは関係なくシャーデンフロイデと直接負の関連がみられたことになる。これに関して、支援的ユーモア志向は妬みや不公正な現状の認識など外部のストレス事態から喚起されるシャーデンフロイデには関連がみられないが、別の個人内要因から喚起されるシャーデンフロイデには関連がみられるのではないかと考える。例えば、双方の性質と関連する要因として自尊感情が挙げられる。先行研究において、シャーデンフロイデを促進する要因として自尊感情の低下が挙げられているが (Van Dijk et al, 2015; 澤田, 2008)、支援的ユーモアのような自己を励ますためのユーモアは自尊感情と正の関連がみられる可能性がある。支援的ユーモア志向がどのような過程を経てシャーデンフロイデを抑制しているのかについては、今後検討する必要がある。

本研究の意義としては、支援的ユーモア志向というユーモアコーピングが、シャーデンフロイデの抑制に有効である可能性が示唆されたことが挙げられる。

一方、本研究の問題点として、女性のみを対象としたために性差の検討ができなかったことが挙げられる。今回使用した支援的ユーモア志向尺度は東京都内の私立女子大学生154名を対象として尺度が構成されているが、その後の研究では男女で有意差はみられていない (e.g., 伊藤, 2016; 宮戸他, 2016; 谷他, 2008)。しかし、シャーデンフロイデの性差については森尻他 (2014) において女性のみに向向上心とシャーデンフロイデの関連がみられたという結果や、澤田 (2008) において女性よりも男性のほうがシャーデンフロイデの得点が高いことが示されている。これらを踏まえると、今回得られた結果はシャーデンフロイデの水準が低い女性のみにおいてみられるものであり、シャーデンフロイデの水準が高い男性においては支援的ユーモア志向からの影響が異なる可能性があるため、今後検討すべき課題の一つである。

さらに、ユーモアの測定が一種類であったことが挙げられる。本研究では支援的ユーモアのみを詳細に取り扱ったが、支援的ユーモア以外のユーモアが異なる方法によってストレス緩和に影響を及ぼす可能性がある。この関連についても、今後検討する必要があるだろう。

### 引用文献

- Ben-Ze'ev, A. (1992). Pleasure-in-Others'-Misfortune. *Iyyun: The Jerusalem Philosophical Quarterly*, 41, 41-61.
- Feather, N. T. (1989). Attitudes towards the high achiever: The fall of the tall poppy. *Australian Journal of Psychology*, 41, 239-267.
- Feather, N. T. (2008). Effects of Observer's Own Status on Reactions to a High Achiever's Failure: Deservingness, Resentment, Schadenfreude, and Sympathy. *Australian Journal of Psychology*, 60, 31-43.
- 藤井 勉・澤田 匡人 (2014). 自尊感情とシャーデンフロイデー潜在連合テストを用いた関連性の検討一、感情心理学研究, 21, 114-123.
- Hafer, C. L., & Bègue, L. (2005). Experimental research on just world theory: problems, developments, and future challenges. *Psychological Bulletin*, 131, 128-167.

- 石井 辰典・澤田 匡人 (2015). なぜ不公正者の不幸を喜んでしまうのか?—サンクション行動傾向とシャーデンフロイデの関連—, 感情心理学研究, 23, p. os11.
- 伊藤 理絵 (2016). 青年期における笑いの性差—笑いに対する積極性尺度の開発と妥当性からの検討—, 笑い学研究, 23, 33-45.
- 今野 裕之・堀洋 道 (1998). 正当世界信念が社会状況の不公正判断に及ぼす影響について, 筑波大学心理学研究, 20, 157-162.
- Lange J., Boecker L. (2019). Schadenfreude as social-functional dominance regulator. *Emotion*, 19, 489-502.
- Lee, S. A. (2019). The dark tetrad and callous reactions to mourner grief: Patterns of annoyance, boredom, entitlement, schadenfreude, and humor. *Personality and Individual Differences*, 137, 97-100.
- Lefcourt, H. M., Davidson, K., Prkachin, K. M., & Mills, D. E. (1997). Humor as a stress moderator in the prediction of blood pressure obtained during five stressful tasks. *Journal of Research in Personality*, 31, 523-542.
- Lerner, M. J., & Miller, D. T. (1978). Just world research and the attribution process: Looking back and ahead. *Psychological Bulletin*, 85, 1030-1051.
- Lerner, M. J., & Simmons, C. H. (1966). Observer's reaction to the "innocent victim": Compassion or rejection? *Journal of Personality and Social Psychology*, 4, 203-210.
- 宮戸 美樹 (2016). ユーモア表出行動と表出相手との親密さの関連, 横浜国立大学教育人間科学部紀要. I, 教育学, 18, 115-127.
- 宮戸 美樹・上野 行良 (1996). ユーモアの支援的効果の検討—支援的ユーモア志向尺度の構成—, 心理学研究, 67, 270-277.
- 森尻 珠綺・伊藤 恵理子・上淵 寿 (2014). 妬みがシャーデンフロイデに及ぼす影響, 東京学芸大学紀要 総合教育科学系, 65, 191-201.
- Pietraszkiewicz, A. (2013). Schadenfreude and just world belief. *Australian Journal of Psychology*, 65, 188-194.
- Rubin, Z., & Peplau, A. (1975). Who believes in a just world?. *Journal of Social Issues*, 31, 65-89.
- 澤田 匡人 (2008). シャーデンフロイデの喚起に及ぼす妬み感情と特性要因の影響—罪悪感, 自尊感情, 自己愛に着目して—, 感情心理学研究, 16, 36-48.
- 澤田 匡人・新井 邦治郎 (2002). 妬みの対処方略に及ぼす, 妬み傾向, 領域重要度, および獲得可能性の影響, 教育心理学研究, 50, 246-256.
- 清水 裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- Smith, R. H. (2013). *The Joy of Pain: Schadenfreude and the Dark Side of Human Nature*. New York: Oxford University Press.
- (リチャード・H・スミス, 澤田匡人 (訳) (2018). シャーデンフロイデ 人の不幸を喜ぶ私たちの闇 勁草書房)
- 白井 美穂 (2010). 厳罰傾向と正当世界観の理解へ向けて (2) 尺度の検討, 東洋大学大学院紀要, 47, 151-166.
- 谷 忠邦・大坊 郁夫 (2008). ユーモアと社会心理学的変数との関連についての基礎的研究, 対人社会心理学研究, 8, 129-137.
- 上野 行良 (1992). ユーモア現象に関する諸研究とユーモアの分類化について, 社会心理学研究, 7, 112-120.
- Van de Ven, N., Hoogland, C. E., Smith, R. H., van Dijk, W. W., Breugelmans, S. M., & Zeelenberg, M. (2015). When envy leads to schadenfreude. *Cognition and Emotion*, 29, 1007-1025.
- Van Dijk, W. W., Ouwerkerk, J. W., Smith, R. H., & Cikara, M. (2015). The role of self-evaluation and envy in Schadenfreude. *European Review of Social Psychology*, 26, 247-282.

#### 付記

本論文は第29回感情心理学会大会における発表された内容を再構成したものである。

発表抄録は, 感情心理学研究29巻 Supplement号 p.S1-02に掲載されている。

なお, 研究実施にあたり, 同大学の研究倫理委員会の審査及び承認を得た。

#### 利益相反

本論文に関して, 開示すべき利益相反関連事項はない。

#### 著者分担

第1著者が本研究を発案し, 調査の実施, データ分析を行い, 草稿をまとめた。第2著者は, 草稿の修正を行った。第3著者は, 研究デザインと分析計画に助言を行った。最終稿は三人で確認した。

#### 著者紹介

菊池里奈 関西大学心理学研究科 M2。2020年3月梅花女子大学心理こども学部心理学科卒業, 学士(心理学)。関西大学心理学研究科博士前期課程に進学し, 在籍中。

阿部晋吾 関西大学社会学部教授。2005年関西大学大学院社会学研究科修了, 博士(社会学)。梅花女子大学講師, 准教授, 教授を経て, 2019年より現職。専門は社会心理学で, 怒りや吐りが人間関係に及ぼす影響に関する研究を主に行

う。著書に『自己愛の心理学：概念・測定・パーソナリティ・対人関係』（分担執筆，金子書房），『怒りの心理学』（分担執筆，有斐閣）など。

福井 斉 梅花女子大学心理こども学部准教授。2011年関西大学大学院社会学研究科修了，博士（社会学）。梅花女子大学講師を経て，2017年より現職。専門は社会心理学で，自尊感情の形成要因や基盤の発達的变化に関する研究を主に行う。著書に『青年心理学』（分担執筆，ブレーン出版），『こどもの自信白書』（分担執筆，イロドリ出版）など。

Correspondence concerning to this article should be addressed to Ms. Rina Kikuchi at foruniversity6@gmail.com

## 要 旨

本研究では，シャーデンフロイデの喚起を規定する要因として妬み，不公正な現状の認識，支援的ユーモア志向に着目し検討を行った。女子大学生158名（平均年齢19.36歳，標準偏差1.15歳）を対象に質問紙調査を実施した。重回帰分析を行った結果，妬み・不公正な現状の認識とシャーデンフロイデとの間に有意な正の関連がみられた。また，支援的ユーモア志向がシャーデンフロイデに対し有意な負の関連がみられ，支援的ユーモアを志向することがシャーデンフロイデの抑制に有効である可能性が示唆された。

キーワード：シャーデンフロイデ，支援的ユーモア，不公正な現状の認識，妬み